

## 学会彙報（二〇二〇年六月～十二月）

### 仏教学会活動報告

#### ◇新入会員歓迎講演会

八月六日（木）午後一時～

苦悩の現場から紡ぎ出された言葉

本学教授 箕浦暁雄

※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンラインで開催した。

### 編集後記

二〇二〇年はコロナ禍の一年となった。七月に予定されていた東京オリンピックは延期となり、日本印度学仏教学会の学術大会も初のオンラインリモートシステムによる開催となった。

大谷大学では二〇二〇年度後期から教室での対面授業が再開されている（受講生が百名強を超える授業を除く）。対面授業の再開に際して、各教室・研究室の空調設備が新たに整えられ、教卓には教員と学生とを隔てる透明のアクリル板が設置されるなど対策が施された。各授業では、自宅での受講を希望する学生向けに授業を同時配信するハイブリッド（ハイフレックス）型が採用されている。授業が終了すると学生・教員は各自の座

席・机を消毒し、また授業の合間に清掃作業員の方が常に教室を消毒してくださっている。大学キャンパスの出入校に際しては学生証をカードリーダーに通して出入校の記録を残すと同時に、非接触型体温測定システムで検温が行なわれている。慶聞館内の共有スペースはほとんど立入禁止となり、大学食堂は学部に応じて利用時間が分けられている。学内の様子を見ると、学生も教員も緊張感をもって予防策を徹底しており、新型コロナウイルス感染を正しく恐れているように見受けられる。現在の北大路キャンパスの様子をお伝えすれば、このようになるであろうか。

果たして、公共の空間において我々がマスクを外す日は来るのであるうか。その日の到来は、まだまだ先のように思われる。ともかくにもコロナ禍のさなかで、日々の記憶すら覚束ない混乱に混乱を重ねた異例づくしの一年であった。編集作業も遅れに遅れた。執筆者にお詫び申し上げます。

七月には長崎法潤先生と鍵王良敬先生とが相次いで還浄された。ここに追悼の意を表する次第である。両先生とも大谷大学の伝統を体現した、学者らしい学者であった。穏やかな長崎先生と、押し強い鍵主先生と。『仏教学セミナー』のバックナンバーあるいは大谷大学学術情報リポジトリから両先生の講演録を辿れば、そのお人柄に接することができる。

本号には、織田顕祐先生の最終講義と、箕浦暁雄先生の新入会員歓迎講演とを収録することができた。いずれも出色の講義録・講演録である。ぜひご味読いただきたい。

（上野）